

家族に対する満足感と家族イメージとの関連 ：幼少期のふりかえりを通して

吉澤 千夏*・磯部 里緒**

(平成29年8月31日受付；平成29年11月28日受理)

要 旨

本研究の目的は、大学生による幼少期の振り返りを通して、家族に対する満足感と家族イメージの関連を明らかにすることであった。分析にあたっては、家族構成、家族関係における満足度、家族に対するイメージの3つの視点から検討を行い、以下の結果を得た。

(1) 対象者の多くは、自分自身の家族関係に比較的高い満足感を持っており、その満足感と家族構成との間には関連はみられない。

(2) 家族に対してポジティブかつソフトな家族イメージを持つ者が多い。また、「核家族」よりも「拡大家族等」の方が家族に対してよりポジティブなイメージを持つ傾向がみられる。

(3) 家族に対してネガティブかつハードなイメージを持つ者よりも、ポジティブかつソフトなイメージを持つ者の方が、家族関係における満足度が高いものの、家族イメージに関わらず、全体として、家族に対する満足度は高い。

KEY WORDS

satisfaction to their family 家族に対する満足感, image of their family 家族イメージ, early childhood age 幼少期, university student 大学生

1. 緒言

家族形態の変化が言及されるようになって久しい。平成28年度国民生活基礎調査の概況⁽¹⁾によれば、「夫婦と未婚の子のみの世帯」が全世帯の29.5%を占め、次いで「単独世帯」が26.9%、「夫婦のみの世帯」が23.7%となっており、「三世帯世帯」はわずか5.9%に過ぎない。昭和61年には、「夫婦と未婚の子のみの世帯」が全世帯の41.1%で最も多いものの、次いで「単独世帯」が18.2%、「三世帯世帯」が15.3%、「夫婦のみの世帯」が14.4%であり、この30年の間に、「単独世帯」「夫婦のみの世帯」が増加する等、世帯規模が縮小し、いわゆる「拡大家族」である「三世帯家族」が減少している。このような家族形態の変化は、親、それに加えてきょうだいといった限定的な人間関係の中で育つ子どもの増加を示唆しており、多様な人間関係の中で子どもの育ちが困難になりつつあることを示していると考えられる。

しかし、いかに家族形態が変化しようとも、子どもの育つ場としての家族の重要性に変わりはない。子どもにとって家族は、生命維持を全面的に依存する場として始まる。生まれて間もない子どもは、衣食住の全てを養育者に依存しており、多くの場合、その養育役割を果たすのが家族であり、その存在は子どもの育ちにとって重要な意味を持つ。また、現代社会においてはその後、多くの子どもが主たる養育者としての母親との間に愛着を形成し、それがその後の人間関係のベースとなることは広く知られている⁽²⁾⁽³⁾⁽⁴⁾。愛着の形成には、子どもと特定の養育者との相互作用において、「安全の感覚」を得ることができるという確信を持てるか否かが重要であるといわれている⁽⁵⁾。さらに、子どもは多様な人間関係のネットワークの中に存在し、その多様なネットワークの一端を担う父母、きょうだい、祖父母等が子どもの発達を支えていると考えられている⁽⁶⁾。この点からも、子どもが多様な家族構成員との良好な関係を築くことは、子どもの成長発達にとって欠くことはできないものであるといえる。

上記を裏付けるように、小学生を対象とした研究⁽⁷⁾では、家族に対する満足度が子どもの抑うつ状態や不安感に影響し、特に子どもと父親、子どもと母親の関係ではなく、父母の関係(夫婦関係)が良好であると子どもに認知され、その関係に満足感を得ることが、子どもの精神的健康に影響することが明らかになっている。このことは、子どもにとって家族との関係性が、自分と家族構成員との一対一の関係のみならず、構成員同士の関係を含む、多様な関係性を持つものとして捉えられていることを示唆している。さらに、大学生を対象とした研究⁽⁸⁾では、母親に比べて

*自然・生活教育学系 **新発田市役所こども課ななほ保育園

交流に隔たりがあり、会話も少ない父親に対してであっても、その関係を「うまくいっている」と評価し、満足度は高いという。家族構成員とのかかわりはそれぞれ多義的であり、それを子ども自身がどのように受け止めるかが、家族に対する満足感に影響すると考えられる。

そもそも人間の行動は、他の多くの動物と同様に「良い—悪い」という感情次元を基礎としており、良いと評価されれば対象に対し接近し、悪いと評価されれば対象を回避するという行動が成り立つ⁹⁾ことから、多くの子どもが最も密にかかわるであろう家族との関係においても、この行動は当然ながら成立すると考えられる。つまり、家族に対して良いイメージを持つことができれば家族に接近し、十分にかかわりを持つことになるであろうし、悪いイメージを抱くならば、家族を回避し、家族関係は希薄になることが想定される。

そこで本研究は、家族に対する満足感と家族イメージの関連を明らかにすることを目的とする。これにより、どのような家族イメージが家族に対する満足感を高める要因となりうるのかを検討する。その際、大学生による幼少期の振り返りを基に、分析を行う。幼少期は愛着の形成にとって非常に重要な時期でありながら、対象年齢児自身が自らの家族やそれに対するイメージを評価することが難しい。そこで、幼少期を振り返ることが可能であり、家族とそのイメージを評価することが可能である大学生を対象に、幼少期の家族に対する満足度とイメージについて回答を求め、その関連を明らかにすることとする。

2. 方法

2.1 調査対象

N県J大学に在学する学生210名である。このうち、調査紙を最後まで回答しておらず、信頼性に欠けると考えられる1名を除く、209名を分析対象とする。

2.2 調査方法

調査は2016年5月である。著者の講義終了後に調査用紙を配布し、その場で回答するように依頼した後、回収を行う。

2.3 調査紙の構成

調査紙は、以下の内容で構成されている。

①対象者の属性

対象者の年齢及び性別

②家族構成

本研究における家族とは、対象者が「家族である」と認識しているものを指しており、必ずしも生物学的・社会的な家族を意味していない。そこで、対象者が小学生当時、家族だと認識している家族構成員を明らかにするために、「小学生の頃にあなたが日常生活を共にしていた家族だと思う人をあなたからみた続柄で教えてください。」との質問を提示し、それらについて記述式による回答を求める。

思い出す幼少期を「小学生当時」としたのは、多くの学生にとって、思い出すことが可能な最も古い年代が小学生当時であることによるものである。これまで大学の講義等で、学生に「幼少期」を思い出す課題を提示したところ、多くの学生がいわゆる幼児期を思い出すことが困難であることが経験的にわかっている。このことから、出来るだけ幼い頃を思い出すために、ここでは「小学生当時」を振り返ることとしている。

③家族に対する満足感

対象者が小学生当時、自分の家族関係にどの程度満足していたかを明らかにするために、「あなたは自分の家族との関係に、どの程度満足していましたか？」との質問に対して、「とても不満」を「1」、「とても満足」を「5」とする5件法での回答を求める。これを「家族関係における満足度」として、これからの分析に用いる。さらに、その評価の理由について、自由記述による回答を求める。

④家族に対するイメージ

対象者が小学生の頃、自らの家族に対してどのようなイメージを抱いていたかを明らかにするために、「あなたは自分の家族に対してどのようなイメージを持っていましたか？」と質問し、それぞれが反意語の構造となっている感情語を中心とした12形容詞対¹⁰⁾を用いて、家族関係に対して抱くイメージを4段階評価で回答を求める。形容詞対の中で、先に表記される形容詞（左側）を「1」とし、あとに表記される形容詞（右側）を「4」とし、点数化したも

のを分析に用いる（表1）。得点の低い形容詞は、ネガティブ（「嫌い」「親しみにくい」「不愉快な」「悪い」「暗い」「冷たい」「弱い」「小さい」「狭い」）またはソフト（「穏やかな」「柔らかい」「単純な」）なイメージを示しており、得点の高い形容詞はポジティブ（「好き」「親しみやすい」「愉快的な」「良い」「明るい」「暖かい」「強い」「大きい」「広い」）またはハード（「激しい」「固い」「複雑な」）なイメージを示している。

その他にも本調査紙では、「家族に対する親和性」及び「家族関係における対人的疎外感」についての質問も記載されている。しかし、本報告ではその点については言及しないため、これらの説明については省略する。

表1 12形容詞対一覧⁽¹¹⁾

1	—	2	—	3	—	4
嫌い						好き
親しみにくい						親しみやすい
不愉快な						愉快的な
悪い						良い
暗い						明るい
冷たい						暖かい
弱い						強い
穏やかな						激しい
柔らかい						固い
小さい						大きい
単純な						複雑な
狭い						広い

3. 結果及び考察

3.1 対象者の年齢及び性別

対象者の平均年齢は19.3歳（SD=2.1）である。また、対象者の性別は男性112名、女性94名、不明3名である。

3.2 対象者の家族構成

「小学生の頃にあなたが日常生活を共にしていた家族だと思える人をあなたからみた続柄で教えてください。」との問いに対する回答結果を表2に示す。日常生活を共にしていた家族で最も多いのは「母」(96.6%)であり、次いで「父」(88.4%)、「きょうだい」(88.4%)の順となっている。これに対し、「祖父」「祖母」と同居し、家族だと思える者とはそれぞれ86名(41.5%)、108名(52.1%)である。対象者のうち、父母の「両方またはいずれか」と子のみ(本人及びきょうだい)を家族と回答したのは91名(43.5%)であることから、対象者が小学生の頃、4割強が核家族、5割強が拡大家族等の中で育まれてきたことがわかる。

表2 家族構成 n=207

続柄	父	母	祖父
人数 (%)	183 (88.4)	200 (96.6)	86 (41.5)
続柄	祖母	きょうだい	その他
人数 (%)	108 (52.1)	183 (88.4)	29 (14.0)

3.3 家族関係における満足度

「あなたは自分の家族との関係に、どの程度満足していましたか？」との問いに対する回答を表3に示す。「とても満足」と回答

表3 家族関係における満足度 n=200

	とても不満 (1)	やや不満 (2)	どちらでもない (3)	やや満足 (4)	とても満足 (5)
人数 (%)	3 (1.5)	13 (6.5)	29 (14.5)	63 (31.5)	92 (46.0)

するものが46.0%で最も多く、次いで「やや満足」(31.5%)、「どちらでもない」(14.5%)の順となっている。「とても満足」「やや満足」を合わせると78.5% (175名)であり、全体の3/4を超えている。一方、「とても不満」「やや不満」を合わせると8.0% (16名)である。このことから、対象者の多くは家族に対する満足感を得ていた一方で、対象者のおよそ1割は、家族に対する満足感を得ていなかったことが明らかになる。

さらに、家族構成別に家族関係における満足度の平均をみると(表4)、「核家族」の家族関係における満足度は4.16、「拡大家族他」の家族関係における満足度は4.13である。t検定の結果、有意な差は認められない。以上のことから、家族構成と家族関係における満足度には、直接的な関係がみられない。

表4 家族関係における満足度：家族構成による (n)

	核家族(88)	拡大家族他(111)
満足度	4.16	4.13

t(197) = .232, n.s.

3.4 家族に対するイメージ

「あなたは自分の家族に対してどのようなイメージを持っていましたか？」に対する回答結果を表5に示す。前述した12形容詞対のうち、「嫌い-好き」「親しみにくい-親しみやすい」「不愉快な-愉快的な」「悪い-良い」「暗い-明るい」「冷たい-暖かい」「弱い-強い」「小さい-大きい」「狭い-広い」の9対については、「3」「4」と回答す

る者を合わせると全体の半数を上回っている（いずれも7割以上）。このことから、家族に対して「好き」「親しみやすい」「愉快的」「良い」「明るい」「暖かい」「強い」「大きい」「広い」というポジティブなイメージを対象者の多くが持っていることがわかる。一方、「穏やかな-激しい」「柔らかい-固い」「単純な-複雑な」の3対については、「1」「2」と回答する者を合わせると全体の半数を超えており（いずれも6割以上）、「穏やかな」「柔らかい」「単純な」家族イメージを持つ対象者が、「激しい」「固い」「複雑な」家族イメージを持つ対象者よりも多い。このことから、対象者の多くは、家族に対してポジティブなイメージを持つとともに、「穏やかな」「柔らかい」「単純な」といったソフトな家族イメージを持っていることがわかる。

さらに、家族構成別（核家族、拡大家族他）に上記の12形容詞対に対する回答の平均をみると、「嫌い-好き」（核家族：3.43、拡大家族他：3.70、 $t(152)=2.960$, $p<.01$ ）、「親しみにくい-親しみやすい」（核家族：3.48、拡大家族他：3.69、 $t(168)=2.134$, $p<.01$ ）、「狭い-広い」（核家族：2.64、拡大家族他：2.96、 $t(184)=2.611$, $p<.01$ ）の3つの形容詞対において有意差が、「悪い-良い」（核家族：3.43、拡大家族他：3.60、 $t(203)=1.721$, $p<.10$ ）において有意な傾向が認められる。いずれにおいても、「核家族」よりも「拡大家族他」の方が、平均値が高いことから、よりポジティブなイメージを持つことが明らかになる。一方で、それ以外の8つの形容詞対については、家族構成との間で有意な差は認められない。

このことから、家族構成が「核家族」であるか、それ以外の「拡大家族他」であるかは、一部の形容詞対を除いて、家族イメージとは関連がみられない。一方、家族構成との関連がみられる形容詞対をみると、いずれも「核家族」よりも「拡大家族他」において有意にポジティブなイメージを持っており、家族の構成員が多様であることが、家族イメージをポジティブにする効果を持つことが示唆される。

3.5 家族関係における満足度と家族に対するイメージとの関連

これまでの結果から、対象者の多くは家族関係における満足度が比較的高く、家族に対するイメージもポジティブかつソフトなものであることが示されている。そこで本項では、家族関係における満足度と家族に対するイメージとの関連を明らかにするために、形容詞対毎に家族関係における満足度の比較を行う。そのために、12形容詞対に対する回答結果のうち、「1」「2」と回答した者と、「3」「4」と回答した者とは分類し（ex）「嫌い-好き」の場合、「1」「2」=「嫌い」、「3」「4」=「好き」、各群の家族関係における満足度の平均値を示すとともに、各形容詞対の家族関係における満足度の比較をt検定により行う。

その結果、すべての形容詞対において、有意差もしくは有意な差がある傾向が認められる（表6）。有意に満足度が高いのは、家族関係におけるイメージを「好き」「親しみやすい」「愉快的」「良い」「明るい」「暖かい」「大きい」（いずれも $p<.01$ ）、「単純な」「広い」（いずれも $p<.05$ ）と回答する者であり、「強い」「穏やかな」「柔らかい」については、満足度が有意に高い傾向が認められる（いずれも $p<.10$ ）。これらはすべて、家族関係における満足度の平均が「4」を超えており、家族関係に高い満足度を持っていることが明らかになる。

このことから、家族に対してネガティブかつハードな家族イメージを持つ者よりも、「好き」「親しみやすい」「愉快的」「良い」「明るい」「暖かい」「強い」「大きい」「広い」といったポジティブなイメージや、「穏やかな」「柔らかい」「単純な」といったソフトな家族イメージを持つ者の方が、家族関係における満足度が高いことが示唆される。一方、対となっている形容詞のうち、「親しみにくい」「不愉快的」「暗い」「冷たい」「弱い」「激しい」「固い」「小さい」「複雑な」「狭い」と回答した者の家族関係における満足度の平均は、いずれも「3」を超えている。先にも示したように、家族関係における満足度は、「とても不満」を「1」、「とても満足」を「5」とする5件法での回答を求めており、その中間点は「3」である。この点を考慮すれば、家族に対して「親しみにくい」「不愉快的」「暗い」「冷

表5 家族に対するイメージ

	1	2	3	4		n
嫌い	0 (0.0)	17 (8.4)	53 (26.2)	132 (65.3)	好き	202
親しみにくい	3 (1.4)	14 (6.7)	48 (23.1)	142 (68.5)	親しみやすい	207
不愉快的	3 (1.4)	32 (15.3)	66 (31.7)	107 (51.4)	愉快的	208
悪い	4 (1.9)	17 (8.2)	52 (25.1)	134 (64.7)	良い	207
暗い	5 (2.4)	13 (6.2)	64 (30.9)	125 (60.3)	明るい	207
冷たい	5 (2.4)	13 (6.3)	59 (28.7)	128 (62.4)	暖かい	205
弱い	5 (2.4)	22 (10.5)	97 (46.6)	84 (40.3)	強い	208
穏やかな	41 (19.7)	85 (40.8)	62 (29.8)	20 (9.6)	激しい	208
柔らかい	38 (18.3)	92 (44.4)	57 (27.5)	20 (9.6)	固い	207
小さい	9 (4.3)	46 (22.1)	87 (41.8)	66 (31.7)	大きい	208
単純な	44 (21.1)	88 (42.3)	58 (27.8)	18 (8.6)	複雑な	208
狭い	16 (7.6)	50 (24.0)	98 (47.1)	44 (21.1)	広い	208

たい」「弱い」「小さい」「狭い」といったネガティブなイメージや、「激しい」「固い」「複雑な」といったハードなイメージを持っていたとしても、家族関係における満足度が大きく低下するわけではないともいえる。しかし、「嫌い」「悪い」と回答した者については、家族関係における満足度の平均は「3」に満たない。家族に対するネガティブかつハードなイメージは家族関係における満足度を必ずしも大きく低下させるものではないものの、「嫌い」「悪い」という感情は、家族関係に対する満足度を低下させる要因となることが示唆される。

以上のことから、家族関係に対してポジティブかつソフトなイメージを持つことは、家族関係における満足度の高さに関連があるものの、家族関係に対するイメージは概してポジティブかつソフトである傾向にあることが明らかになる。また、ネガティブかつハードな家族に対するイメージを持つことは、家族関係における満足度を大幅に低下させるものではないものの、家族に対して「嫌い」「悪い」とのイメージを持つことは家族関係における満足度を低減させる要因となることが示唆される。

本研究は、家族関係における満足度と家族に対するイメージの関連について、大学生による幼少期の振り返りを基に明らかにしたものである。しかし、紙面の都合上、家族に対する満足感と家族イメージの形成に、何が影響を及ぼしたかについての言及までには至っていない。また、家族イメージを評価するために用いた12形容詞対がそれぞれどのような関係性を持ち、さらに家族関係に対する満足度とどのようにかわるのかについても、明らかにされていない。今後、上記の課題を含めたさらなる詳細な分析が求められる。

4. おわりに

本研究の目的は、大学生による幼少期の振り返りを通して、家族に対する満足感と家族イメージの関連を明らかにすることであった。分析にあたっては、家族構成、家族関係における満足度、家族に対するイメージの3つの視点から検討を行い、以下の結果を得た。

- (1) 対象者の多くは、自分自身の家族関係に比較的高い満足感を持っており、その満足感と家族構成との間には関連はみられない。
- (2) 家族に対してポジティブかつソフトな家族イメージを持つ者が多い。また、「核家族」よりも「拡大家族等」の方が家族に対してよりポジティブなイメージを持つ傾向がみられる。
- (3) 家族に対してネガティブかつハードなイメージを持つ者よりも、ポジティブかつソフトなイメージを持つの方が、家族関係における満足度が高いものの、家族イメージに関わらず、全体として、家族に対する満足度は高い。

なお、本研究の一部は、平成28年度上越教育大学卒業研究（磯部里緒）において、発表されている。本研究にご協力くださいました皆さまに心より感謝申し上げます。

表6 家族に対するイメージ（形容詞対）と家族における満足度の平均

	嫌い (n=15)	好き (n=179)
満足度の平均	2.53	4.30
		t(192)=7.762, p<.01
	親しみにくい (n=15)	親しみやすい (n=184)
満足度の平均	3.07	4.22
		t(197)=4.545, p<.01
	不愉快な (n=33)	愉快的な (n=167)
満足度の平均	3.12	4.34
		t(198)=7.237, p<.01
	悪い (n=20)	良い (n=179)
満足度の平均	2.85	4.28
		t(197)=6.757, p<.01
	暗い (n=18)	明るい (n=181)
満足度の平均	3.22	4.23
		t(197)=4.282, p<.01
	冷たい (n=16)	暖かい (n=181)
満足度の平均	3.31	4.20
		t(195)=3.531, p<.01
	弱い (n=26)	強い (n=174)
満足度の平均	3.81	4.19
		t(198)=1.841, p<.10
	穏やかな (n=122)	激しい (n=78)
満足度の平均	4.25	3.97
		t(147)=, p<.10
	柔らかな (n=126)	固い (n=73)
満足度の平均	4.24	3.96
		t(197)=1.924, p<.10
	小さい (n=54)	大きい (n=146)
満足度の平均	3.83	4.25
		t(198)=2.699, p<.01
	単純な (n=129)	複雑な (n=71)
満足度の平均	4.26	3.93
		t(198)=2.247, p<.05
	狭い (n=63)	広い (n=137)
満足度の平均	3.83	4.28
		t(198)=3.105, p<.05

■は有意に満足度の平均が高い項目

引用文献

- (1) 厚生労働省 (2017) 国民生活基礎調査の概況. 1.
- (2) Bowlby, J., (1991) 「母子関係の理論Ⅰ：愛着行動」(訳：黒田実郎, 大羽葵, 岡田洋子, 黒田聖一). 岩崎学術出版社, 1-482.
- (3) Bowlby, J., (1995) 「母子関係の理論Ⅱ：分離不安」(訳：黒田実郎, 岡田洋子, 吉田恒子). 岩崎学術出版社, 1-480.
- (4) Bowlby, J., (1991) 「母子関係の理論Ⅲ：対象喪失」(訳：黒田実郎, 横浜恵三子, 吉田恒子). 岩崎学術出版社, 1-538.
- (5) 前掲 (3)
- (6) Lewis, M., (2007) 子どもと家族—ソーシャル・ネットワーク・モデル—. 「愛着からソーシャル・ネットワークへ—発達心理学の新展開」(編：Lewis, M., 編・監訳：高橋恵子). 新曜社. 7-38.
- (7) 内田利広・藤森崇志 (2007) 家族関係と児童の抑うつ・不安感に関する研究：子どもの認知する家族関係. 京都教育大学紀要, 110, 93-110.
- (8) 一棟宏子・若井希水子 (2002) 家庭における女子学生と親との交流に関する調査：本学学生の場合. 大阪樟蔭女子大学学芸学部論集, 39, 99-108.
- (9) 荘巖舜哉・沼田宙 (2005) 子ども期に形成された親のイメージと現代青年の感情制御行動. 発達研究, 19, 125-138.
- (10) 前掲 (9)
- (11) 前掲 (9)

The relationship between the satisfaction to the family and the image of the family: through recalling about their own early childhood.

Chinatsu YOSHIZAWA* · Rio ISOBE**

ABSTRACT

The purpose of this research was to clarify the relationship between the satisfaction to family and the image to family. The targets of this study were university students. The university students remembered their childhood age and answered the satisfaction to their family and the image to their family. The results of the analysis are as follows:

1. Many targets had a high satisfaction to their family. In addition, there was no relation between the satisfaction to their family and family composition.
2. Many targets have positive and soft family images to their family. Also, the targets who grown up in "extended family etc." tend to have more positive images of their family than the targets who grown up in "nuclear family".
3. The targets who have positive and soft images were more satisfied with their family than the targets who have negative and hard images to their families. However, regardless of the images to the family, overall, satisfaction to their family was high.